

## 「徐福渡来はやはり真実だった2」

たかみやしんじ

2024年10月、中国国慶節。10月1日が建国記念日で全国において盛大に祝典が行われる。学校や企業も1週間程度の休日となることから、春節とならび多くの中国国民が国内外に旅行を計画する。この年の海外旅行先で日本が一番人気であったことが話題になった。特に、静岡県伊東市の「大室山」が高い人気を博したことも話題となった。その人気の理由が流行したアニメ映画の“聖地巡礼”ということであった。

静岡県伊東市といえば温泉旅館が有名で、“伊東に行くなら〇〇ヤ…”というコマーシャルソングは多くの日本人が知っているだろう。しかしながら、「大室山」となると実際に伊東市を観光で訪れた人でないと知らない人が多いのかもしれない。標高580mの独立峰が唐突に聳えている。リフトで頂上に登ると火口をまわる周回路があり、伊豆諸島・相模湾・富士山などの眺望が素晴らしい。また、海上から吹き上げる風による霧の発生といった自然現象も直に体験される。

中国人の海外旅行先として日本の好感度が高いのは何故だろうか。近いというのが大きな理由の一つといわれている。しかしながら、国内に不安定なことが起こると必ずといっていいほど、過去の日本の行状を標的にして不安定を解消しようとする。そして、それが概ね成功して国内が沈静化する。そのようなことが繰り返されてきた。それでも、中国人は相変わらず旅行先に日本を選ぶのである。何故だろうか。

根底に古代からDNAに伝わる「神仙思想」というものがあるのだろう。長い年月、無意識下で遠い東の先の海に在る「蓬莱山」にずっと憧れてきたのである。そしてまた、蓬莱山＝富士山ということにも…。紐解けば徐福ご一行様も同様であったと、そのようなことが漢籍には記述されているのである。

もう一つ、共産党政権による統治となった中国では王朝が途絶えてしまった。これに対し日本では連綿と続く皇統譜があり、皇居には天皇陛下ご一家が住んでおられる。英国王室との交流も盛んで友好的なのである。共産主義を謳って王朝に倣うわけにはいかない。中国の紫禁城は現在では博物館となってしまったのである。

しかしながら、考えてみれば紀元前660年から続いていると記紀に記述される日本の皇統譜は、中国に負けまいとして実際よりかなり古くみせたり、その内容についても相当に体裁を取り繕ったのではなかったか。だから、事実はかなり危ういのであろう。

前稿「徐福渡来はやはり真実だった」では、日本人のゲノムの三重構造説から徐福渡来の真実に迫ったのであるが、本稿「徐福渡来はやはり真実だった2」においては、神話の中でも一際大きな意味をもつ「天孫降臨」の紙背に隠された謎を解析することによって、徐福渡来を再度検証してみたいと考えているところである。

## 序章 猿田彦の正体

猿田彦は、記紀の（ニニギの）天孫降臨において、道案内役として記述されている。知らない人はいないと思われるので詳述は省略させていただくが、その態様については細部記述しないとならない。「日本書紀」の記述。“一人の神が天の八街（道の分かれるところ）に居り、その鼻の長さ七握、背の高さ七尺あまり、正に七尋しちひろというべきでしょう。また口の端が明るく光っています。目は八咫鏡ようで、照り輝いていることは、赤酸漿ほおすきに似ています”。

\*七尋 … 長さの単位。七尋は約12メートルか。

一人の神とは猿田彦のことを言っている。直訳するならば、猿田彦は鼻の長さ1メートル位、背丈は12メートル、目が大層大きく光り輝いている。まるで赤酸漿のようであると。こんな神がいるだろうか。一人の神と捉えるとそのような態様の神がいるはずが無いのである。では、どのように捉えるのか。それを、「船」として捉えることで説得力が俄然増大するのではないだろうか。長さ12メートルの船、帆はまだそれほど大きくは張っていない時代だった。だから、1メートルくらい。これを鼻が1メートルと著した。船の帆としてはせいぜい追い風を受けて進む程度のことだったか。基本的には手漕ぎであったろう。しかしながら、12メートルの長さがあるから漕ぎ手は数人で構成されていた。そして、この船は結構装飾されていたようである。舳先や船尾には輝く銅で飾られていたようである。青谷上寺地遺跡から発掘された土器に描かれている船がある。この船こそ猿田彦に擬したものと同等のものであるように見えてきて仕方がないのであるが…。

猿田彦を一人の神と捉えて、その態様をイメージしても殆ど物語は発展して行かないのである。しかしながら、これを船或いは船団と捉えることによって、俄かに歴史物語が舞台に登場してくるようになるのである。

猿田彦の出生を伝える神社が島根県にある。島根県の神社と言われると多くの方々が即時にイメージされるのは出雲大社ということだろう。そう、出雲国で猿田彦は生まれたらしいのである。「出雲国風土記」には、“加賀郷、郡家北西24里164歩かみむすびのみことのところにある。佐太大神（猿田彦）の生まれたところである。母であるキサガイヒメ（神魂命の御子）が「暗い穴である」と言って金の弓を射ると光り輝いた。だから加加という”。とある。

この「出雲国風土記」が伝える神社が「加賀神社」ということだろう。所在地は島根県松江市島根町加賀1490である。主祭神は母であるキサガイヒメと（子である）猿田彦命である。キサガイヒメが「暗い穴である」と言ったとあるように、もともとは海岸の洞窟くげどに在り、「潜戸大神宮」と称されていたらしい。（雲陽誌）

さて、本稿では猿田彦を一人の神としては捉えていないのであるが、上記の猿田彦の出生を事実として認識するとすれば、物語はどのような展開になるのであろうか。実は、加賀神社の鎮座する島根町加賀は、海に面したエリアが程よい内湾となっていて古来船着き場として好条件の場所だったと考えられるのである。こうした好条件の港であるからこそ、船団を組んで西へ東へと進出する土壌があったものと推察されるのである。即ち、猿田彦を大きな船団に擬していると解釈することの妥当性が高いのではないだろうかと考える次第である。

しかしながら、このことだけでは単なる一つの点であり、もう一つ点がないと線が結べない。どこかにもう一つ点はないものであろうか。実は、それがあったのである。

澤田洋太郎氏が、著作「ヤマト国家成立の秘密」(新泉社)においてそれを記述されている。関連部分を抜粋させていただくと以下のとおりである。“…。ところが、このサルタ彦については、それが物部氏とも関係があると思われるので、そのへんの事情について紹介しておきたい。というのは、「猿田」という地名が密集している地域があるからだ。それは、北九州市から宗像市、直方市にかけての一带のことだ。このあたりは遠賀川の下流域に相当し、前に述べたように赤間物部・弦田物部・芹田物部・二田物部・狭竹物部、それに馬見物部が分布していた地域と重なっている。例えば、北九州市の藤田区(JR黒崎駅の西)だとか、その南の上津役、北の岡垣町、その西の高倉、そして宗像市・直方市・赤池町に「猿田」という字がある。そして、宗像市から鞍手町の間には猿田峠がある。…”。

この宗像市に宗像大社が鎮座することは極めて著名であり、何の説明も要しないのであろう。しかしながら、後の議論に関係してくる可能性もあるので基本的なことは押さえておこうと思う。宗像大社は、福岡県宗像市に鎮座する沖津宮・中津宮・辺津宮三社の総称で、日本全国に三千五百余りある宗像神社の総本社である。所謂宗像三女神、沖津宮(沖ノ島)では田心姫神、中津宮(筑前大島)では湍津姫神、辺津宮(宗像市田島)では一杵島姫神が祀られている。各々父親は須佐之男命とされている。

さて、この二つの地を結ぶものは何かということだが、すでに本稿では猿田彦が船或いは船団と定義した。そして、猿田と称される九州の地域名が宗像ということになれば、これはもはや宗像海人族としか考えられないだろう。

宗像海人族が交易地を求めて九州各地、日本海側各地に展開していった。それらの一つに出雲の加賀郷があったということだろう。そして、須佐之男命(スサノオ)が彼らと提携し九州に乗り込んで行き、宗像海人族本家と連合したということだろう。宗像海人族の領袖の姫を娶ったなら領有したとなるのだろうが、宗像三女神はスサノオの子と記紀が言うので、ここでは連合したということにしておきたい。

こうして、スサノオは北九州、宗像に進出してきた。そして、宗像を拠点にして九州全土の領有を目指すのであった。このことを魏志倭人伝では、卑弥呼の連合国と狗奴国(スサノオの出雲国)・スサノオの九州連合国との対峙として描いている。卑弥呼の連合国の幾つかの国が「ヒナモリ(軍隊)」を設置して狗奴国の進出に備えていると記述されているのである。「ヒナモリ」を設置していたのは、対馬国(対馬)、一大国(壱岐島)、奴国(博多)、不弥国(飯塚)であり、海上からまた陸上からの狗奴国の進出に見事に対峙しているといえないだろうか。因みに、「後漢書」では、“女王国より東、海を千里度ると狗奴国に至る”と記述されているのである。

## 第1章 オオヤマツミとは何か

天孫降臨ということが記紀に記述されている。天照大神の孫が天上から地上(葦原中国)に降りてきて、これを統治することをいうのである。天孫降臨は二つあって、一つはニギギが日向の国に降りてくる話と、ニギハヤヒが大和を平らげる話とがある。

実は、この二つの天孫降臨は連動していて、先ずはニギハヤヒが大和を平らげて地盤を築き、そこにニギギの後裔(神武)が入り込んで初代天皇となるというストーリーになっているのである。そして、着目しなくてはならないのはニギギが日向に降臨した時にオオヤマツミの娘を娶ることである。木花之佐久夜毘売である。とすれば、天皇家は天照大神の系統と

共に、オオヤマツミの系統ともなるのである。更に、ニニギと木花之佐久夜毘売の子（山幸彦）とオオワタツミの娘（豊玉毘売）とに生まれたウガヤフキアエズの子が、やがて神武天皇となるというのである。

後に、この神武天皇のお后探しが始まる。「日本書紀」によれば、神武天皇のお后は“ヒメタタラ五十鈴媛”といい、事代主神が“三島ミゾクイミミ神”の娘と結婚して生まれた子であるという。この段「古事記」では、三島に住む“セヤダタラ姫”とオオモノヌシとの子“ヒメダタライスケヨリヒメ”を宮殿に迎え入れたと記述される。記紀が言うこの“タタラ”とは製鉄の時に用いられる“大型のふいご”のことで、姫の出身氏族が製鉄に関係することを物語っていると考えられている。

スサノオがアシナヅチ・テナヅチ（オオヤマツミの子）の依頼で八岐大蛇（製鉄豪族）を退治して（オオヤマツミの孫の）クシナダヒメを救い、そしてクシナダヒメを娶ったと記紀に記述されている。この話と同様に、事代主（＝大国主命の子）やオオモノヌシ（＝大国主命）は、製鉄系の三島ミゾクイミミ神の娘と婚姻するのである。これらのことを総合すると、どうも“ヒメタタラ五十鈴媛”はオオヤマツミの流れを汲むのではないかと考えられるのである。

少し整理しておこう。天皇家の血統は、九州（日向）における源流が天照大神であることが確認される。そして、「オオヤマツミ」の血統が入る。更に、『オオワタツミ』の血統が入ることなのである。そもそも、天照大神が何者かということが未だ定まっている訳ではない。概ね、天照大神＝卑弥呼というのが大勢のようであるが異論も多い。その上に、オオヤマツミとオオワタツミが被さってきてしまった。

そして、ヤマトにおいては神武天皇が初代天皇として即位後に、オオヤマツミ系の姫が皇后として迎えられたということなのである。

では、いったいオオヤマツミとは何なのかということが次に解明されなくてはならないだろう。「古事記」の記述では、イザナギとイザナミが国生みを終えた次の神生みの段で登場してくるのである。17柱の神々の1柱に大山津見神（山の神）、1柱に鹿屋野比売神（野の神）がいて、この2柱から4対の男女の神が生まれている。狭土の神（＝山の頂で全人未踏の所）、狭霧の神（＝霧深く人が分け入れない所）、閨戸の神（＝断崖絶壁で人が近づくことができない所）、戸或の神（＝大いなる迷路で人が到達叶わない所）…である。即ち、これらは神々が降りてくる所と解釈されるのである。

しかも、これらの神々は天つ神（男神）と国つ神（女神）が対になっているように記述されている。記紀の記述において、姫を娶る＝国の剥奪、領有として描かれることがしばしばある。このことから察せられるのは、オオヤマツミ系の神々が九州はじめ日本の各地に進出して勢力を築いていったという風に解釈されるべきではないだろうか。それはどこであったのか。

まずは、狭土の神として降臨した所であるが、山の頂でオオヤマツミを祀っている所となると、一つには、大山阿夫利神社（神奈川県伊勢原市）がまずは想起されないだろうか。祭神はもちろんオオヤマツミ。ご由緒では2200年前の崇神天皇の時代の創建という。この大山阿夫利神社、関東ではつとに知られる人気の神社である。古くから山岳信仰の対象として知られるが、特に江戸時代においては、参詣する大山講が関東各地に組織され、各地から歩いて参詣する道（大山街道）も幾つか名残を残している。現在では、ケーブルカーが設置さ

れ、比較的簡便に登頂でき、見晴らし台や頂上から相模湾・伊豆諸島などが眼下に眺望される素晴らしさで人気のスポットとなっている。

さて、問題は何故に大山阿夫利神社（祭神：オオヤマツミ）が当地に創建されたのかという理由である。その答えを解く鍵は矢張り記紀に求めなくてはならないだろう。「日本書紀」の記述では、イザナギ・イザナミが三貴神（天照大神・素戔鳴尊・月読尊）を生んだ後のこと、イザナミが火の神カグツチを生んだ時、イザナミは火傷をしてお亡くなりになった。これを恨んだイザナギは剣を抜きカグツチを斬って命を絶つ。“一書にいう。イザナギがカグツチを斬って五つに断たれた。これらはそれぞれ五つの山祇となった。第一の頭は大山祇となった。第二の胴体は中山祇となった。第三の手は麓山祇となった。第四の腰は正勝山祇となった。第五の脚はシギ山祇となった。この時に斬られた血がそそいで石や砂や草木が染まった。これが草木や石や砂自体が燃えることの起こりである”。

次の問題は、これらの記述を一体全体どのように理解したらよいかということである。最後尾の一行に大なるヒントが隠されていると考えられないだろうか。曰く、「これが草木や石や砂が燃えることの起こりである」と。草木が燃えることは説明を要しない。では、石や砂が燃えるとは何を言おうとしているのか。しかも、石や木や草木は血がそそいで、一緒に真っ赤に染まったのである。これらの記述がタタラ製鉄を表現していることは疑う余地がないものと考えられる。即ち、「オオヤマツミとはタタラ製鉄の技術を帯同した集団である」と定義づけられるのである。

そして、「古事記」が記述するように天つ神（男神）が国つ神（女神）を娶って全国に進出して行ったという風に解釈できるのである。この天つ神こそオオヤマツミと考えなくてはならないだろう。では、このオオヤマツミはどこから来たのであろうか。製鉄の技術集団であることから渡来系の人々と考えられるのであるが、そのことを推量するために、もう少しこの集団の進出の軌跡を追ってみよう。

狭霧の神として降臨したのはどこであったのか。長野県諏訪市に足長神社（祭神：アシナヅチミコト）と手長神社（祭神：テナヅチミコト）が鎮座する。諏訪盆地を挟んで南側の山すそに諏訪大社上社（本宮と前宮）が、北側の山すそに両社が対で鎮座する。アシナヅチ、テナヅチといえばオオヤマツミの子である。この夫婦の依頼でスサノオは八岐大蛇を退治したのだった。この両神を頂く人々が諏訪に進出してきた。そして、ある程度の基盤を築いた模様である。その場所は、気象条件から樹木の生育がない草原で形成される「霧ヶ峰高原」の麓に位置するのである「霧ヶ峰高原」界隈は縄文時代においては、良質な黒曜石の産地として大いに隆盛したところであった。

では、何故この土地にオオヤマツミ系の人々が進出してきたのであろうか。その理由は、湖沼の砂鉄の採取による鉄生産を目的としたものだったのではないかとされているのである。諏訪盆地は四方を山々に囲まれており、諏訪湖には山々から流れる幾つもの川があり、水と共に土砂も流れ込んで長い年月を経て平地を形成してきた。この流れ込んできた土砂の中に混じる砂鉄を採取していたというのだ。

古代から伝わる砂鉄の採取方法に「鉄穴流し」というものがある。砂鉄を多く含む山を崩して、土砂を水路に落とし、それを流下させることで比重の軽い土砂と比重の重い砂鉄を分離する方法である。この「鉄穴流し」は人工的に壮大な装置を造るのであるが、湖沼砂鉄は自然の営みの中でこの「鉄穴流し」が行われているというのだ。

余談になるが、諏訪市の隣の茅野市の JR 茅野駅から花蒔地区まで、先の戦争末期に鉄鉱石運搬線「諏訪鉄山専用側線」（約 10 Km）が敷設された。「蓼科高原」から産出される鉄鉱石を

運搬するため急遽敷設された。「蓼科高原」には褐鉄鉱山が点在しており、「諏訪鉄山」と呼ばれていた。こうした、鉄鉱石の採掘と輸送路線の敷設は、枯渇しつつあった国内の鉄資源の補充と戦況の打開のための国策の一つであったのだろう。終戦とともに鉄の採掘は行われなくなったという。余談として記載したのではあるが、この話、諏訪の山には鉄があるということの証明の一つにならないだろうか。

さて、話を進めよう。先述した大山阿夫利神社を創建したオオヤマツミを頂く一行も同様に砂鉄を求めて当地に進出してきたものと思われる。

こちらは、神奈川県鎌倉市稲村ヶ崎に代表される、相模湾の海岸砂鉄（もちろん、河川上流の川砂鉄を含む）を目指してきたのではないかと推量される。相模湾には、酒匂川や相模川が富士山や丹沢山地から流れている。これらの川が運んだ山の砂鉄を含む土砂が相模湾の海岸を形成した。西から、大磯ロングビーチ、片瀬海岸、七里ガ浜、由比ガ浜と続いている。しかしながら、砂鉄はこれらの海岸から等しく同質の砂鉄が採取されるのではないということが分析されている。稲村ヶ崎近辺ではより濃縮されて採取されるというのである。その理由は、酒匂川や相模川により運ばれた土砂が、海流により西から東に移動したのではないかというのである。その証拠に稲村ヶ崎近辺の川の上流には川砂鉄が採取されないことが確認されているのである。

また余談であるが、神奈川県「かながわ」の由来は何か。鶴岡八幡宮所蔵の文書に“武蔵国稲目、神奈河両郷」という郷名の記述があるという。「神奈河郷」は武蔵国久良岐郡の地域（郷）で現在の横浜市神奈川区のことをいう。ここまで記述すると、「鉄穴流し」を思い出さないだろうか。「鉄穴流し」＝「かなながし」⇒「かながわ」⇒「かながわ」の変化が巷間類推されている。しかしながら、まだ、定説として認知されるには至っていないようである。

次に論じたいのは、ナガスネヒコ（「古事記」＝那賀須泥毘古、「日本書紀」＝長髓彦）のことである。記紀の記述を要約すると…。“ナガスネヒコは大和の登美の豪族で、妹がニギハヤヒに嫁ぐ。やがて、イワレヒコ（後の神武天皇）が大和を治めるべく東征してきた時にこれに抵抗するも、最終的にはニギハヤヒがイワレヒコに大和国を差し出す”。この段、「先代旧事本紀」では…。“ニギハヤヒは10種の神宝を持ち、32神の供を従えて天磐船に乗り、高天原から河内国に降りた。その後、また大空を翔け大和国に移る。そして、当時の大和の支配者ナガスネヒコの妹を妻とし、一族の長として大和を治めていた。後に、イワレヒコがやってくると服従を示さないナガスネヒコを殺害し、支配地をイワレヒコに差し出すのだった”。

さて、問題はこのナガスネヒコの素性である。記紀が説明してくれないので、ここは推論するしか方法がないようである。先ず考えなくてはならないのは、ニギハヤヒもイワレヒコも高天原系なのに、何故ナガスネヒコはイワレヒコには恭順しなかったかということである。このことについては後に詳論を予定しているが、ニギハヤヒが出雲系であったからだと考えられるのである。そして、ナガスネヒコも出雲系であったとすれば説明がつくのである。ナガスネヒコが大和国を治められたのは何故か。それは、最新の技術と文化を帯同していたからだと考えられる。それは、鉄の生産技術であり、稲作の文化のことと言って差し支えないだろう。即ち、ナガスネヒコは土着の豪族が勢力を伸長させたのではなく、他の地から進出してきた一族の長と考えられるのである。鉄の生産技術といえばオオヤマツミ一派のことが直ぐに想起されるのであるが、いかがであろうか。ナガスネヒコとは、長脛彦（＝足長彦⇒アシナヅチミコト）ではなかったか。

奈良盆地は古くは湖沼であった。既述の諏訪盆地と同様山々に囲まれていて、数々の河川が盆地に土砂を流入させていたのである。そして、土砂に混じって砂鉄も流入していた。この砂鉄を目指してナガスネヒコは大和に進出してきたのだった。

このナガスネヒコの祖先について記紀が語らないのは何故なのだろうか。また、由緒を告げるような神社も見受けない。あたかも、歴史から祖先を消したかのようである。その理由は、後に神武天皇がヒメタタラ五十鈴媛（オオヤマツミ系）を娶るからだと考えられる。イワレヒコ東征の最大の敵と後の皇后の出自が同系では具合が悪いということだったのであろう。ナガスネヒコは本人と妹は記述されるのだが、親の神が居て二人が生まれたのであるが、親神は戸或の神（＝人が到達叶わない所）なのである。

最後に記述しなければならないのは、オオヤマツミの南九州への進出についてである。何故なら、ニニギが日向の高千穂に降臨した後、オオヤマツミの娘・神阿多津比売（木花之佐久夜毘売）と笠沙の岬で出会い、一目ぼれ、これを娶るからである。この記紀の記述をもとにして（正として）考えるなら、ニニギが日向に降臨するより以前にオオヤマツミは界隈の笠沙の岬に勢力を築いていたとしなくてはならないのである。

「笠沙の岬」とはどこであったか。現状において、有力とされているのは鹿児島県南さつま市の野間岬であろう。「日本書紀」において、“吾田の長屋の笠沙の碕”と記されており、吾田は薩摩国阿多郡＝鹿児島県南さつま市にあたり、神阿多津比売とも関連する。長屋についても同市内に長屋山（ちょうやさん）の名が残っている。これらのことから、「笠沙の岬」は、南さつま市笠沙町にある野間岬に比定されている。南さつま市から日置市、そして、いちき串木野市にかけて砂丘海岸が連なる。日本三大砂丘と言われる「吹上浜」である。この「吹上浜」は砂鉄が含まれる砂浜として知られる。しかしながら、今のところ鉄生産に関わる遺跡などの発掘はないようである。因みに、近隣で砂鉄を産した地は指宿地方であるとされるが、ここまで広域に領域として括るのは少し無理があるかもしれない。

令和6年10月2日、宮崎空港で先の戦時中に米軍から投下された不発弾が突然爆発して話題となった。その後、他に不発弾が埋もれていないか調査が行われた結果、不発弾は発見されなかったが、探査機に反応があった。それは砂鉄であったというのだ。古来、大淀川から運ばれてきた砂鉄が海岸一帯に埋もれているらしいのである。宮崎市折生迫（おりゅうごこ）に戸崎鼻という岬がある。江戸時代には日之御碕（ひのみさき）と言われたとされており、近くに日御碕観音寺が残る。笠狭の崎とも。

これらのことから、宮崎県宮崎市がいきなりクローズアップされてきたのである。しかしながら、オオヤマツミや神阿多津比売の臭いがしない。

宮崎県延岡市の「愛宕山」。「愛宕山」は昔「笠沙の岬」、「笠沙の山」と言われていたと伝わるといふ。ニニギとコノハナサクヤヒメの出会いと求婚が「古事記」に伝わるので、二神のモニュメントが置かれた愛宕山公園は「出会いの聖地」として愛を誓う恋人たちがあとを絶たないという。延岡市には五ヶ瀬川が海に流れている。上流は高千穂峡である。正しく「古事記」の記述のためのスチュエーションが現出されているようである。しかしながら、こちらについて、今度は砂鉄の臭いがしないのである。

大分県国東半島。こちらは各所に砂鉄の採取地が記録されている。その中でも大半は東海岸であり、安ヶ浜・黒津・旭・内田・黒川原・塩屋・奈多などの名があげられる。

この<sup>なだ</sup>奈多に八幡奈多宮（大分県杵築市）が鎮座する。祭神は比売大神・応神天皇・神功皇后である。宇佐神宮と関係の深い神社として知られている。奈多海岸の沖合約300mにある市杵島という小島は八幡奈多宮の元宮である。比売大神（宗像三女神）は最初市杵島に降臨したと伝えられており、岩礁の上には小鳥居が建てられている。（Wikipedia）

また、杵築市は守江湾に面しており自然の良港守江港がある。古来、海上交通の要所として北九州、四国、瀬戸内海などに渡る重要な航路でもあった。伝承では比売大神が市杵島に降臨したというのであるが、その前にオオヤマツミが進出した可能性があるかもしれない。ここが笠沙の岬なのか。その可能性がなしとはし得ないのではあるが、名称として、吾田、笠沙など伝わるものがないので、現状では今一つ説得力が乏しいと言わざるを得ないのである。

## 第2章 天孫降臨とは何か

さて、いよいよ本題の一つ、「天孫降臨」の真実に筆を進めて行こうと思う。記紀の記述では大国主の「国譲り」物語があって、次に「天孫降臨」物語が展開されるのだが、どうもそれでは歴史が首尾よく流れて行かないのである。また、記紀では何故か説明が少ないのであるが、「天孫降臨」には所謂ニギの「天孫降臨」の他にもう一つ、「先代旧事本紀」に詳述されているニギハヤヒの「天孫降臨」があるのだ。本章では、それらの記述を参照しながら<sup>ほんとう</sup>真実の歴史の流れに迫ってみたいと考えているところである。

### （イ） スサノオの九州進出

序章で概要を記述したように、スサノオは出雲を纏めた後に九州（宗像）に進出したのだった。スサノオが出雲を纏めたことの典型的な事例が所謂「八岐大蛇」の退治神話に集約されているのだろう。スサノオはアシナヅチ・テナヅチの依頼により、「八岐大蛇」を退治するというストーリーになっているのだが、このことにもう少し深入りしてみたい。

「八岐大蛇」とは何者か。アシナヅチ・テナヅチとは何者か。まずは、アシナヅチ・テナヅチであるが、すでに第1章で詳論したようにオオヤマツミの子であるアシナヅチ・テナヅチは製鉄系の豪族と認定しなくてはならないのである。このアシナヅチ・テナヅチの娘たちを「八岐大蛇」が求めてきていた。もう既に何人もの娘が攫われていたというのだ。このことの意味するのは、製鉄を生業としていた各地のオオヤマツミ系の豪族の姫が一人ずつ一人ずつ奪われた、即ち、その技術と施設を地域豪族に奪われてきていたというのである。クシナダヒメは最後の豪族を象徴しているのだろう。これをスサノオが救ったと記述されているのである。こここのところの記紀の記述は極めて重要である。即ち、クシナダヒメを救ったのであるから、オオヤマツミ系とは連合関係が築かれたということの意味しているのである。即ち、この頃として極めて重要であった製鉄技術集団と連合したのである。そして、同時に「八岐大蛇」をも併合したというのであるから、それまで「八岐大蛇」と言われてきた界限の諸豪族を併合したということになる。これらの諸豪族はそれまでオオヤマツミ系の姫を攫っていたのであるから、製鉄技術集団を形成していたと解釈しなくてはならない。スサノオは、そうした数多くの製鉄集団をも従えたのであった。「八岐大蛇」の尾から“刀”が出てきたというのは、それらのこと象徴的な表現ということになる。

こうして、出雲を連合したスサノオであるが、スサノオは出雲の長で留まらなかった。何故そのようなことが言えるか。その理由を記紀が記述しているからである。「日本書紀」の記述。“（高天原で乱暴狼藉を働いたスサノオは高天原を追放されることに…。高天原を追われたスサノオとその子五十猛神は新羅に降りるのだが、その地にいることを欲さず、出雲の斐

伊川の鳥上峯に至った。五十猛神は多くの樹木の種を持っていたのだが、新羅には植えずに全てを持ち帰ってきて、九州から始めて大八州国に植えたので青山に被われる国になった”というのである。

この記述は大きくは二つのことを言っている。一つは樹木のことである。この頃の樹木の需要とは何であったのか。それは、船材と製鉄の燃料ということになる。即ち、船を造れることで船団が組める、また、製鉄により武器が整えられると共に稲作用などの農産具が整えられるからである。「日本書紀」の記述では樹木の種を持ち帰って日本中を青山にしたというのだが、そのようなことではないことは明瞭である。話は逆で青山を求めて各地に進出して行ったと解釈すべきなのである。これが二つ目のことである。そして、着目したいのは、九州から始めたというところなのである。そして、更に大八州国を目指した。大八州国といってもこの頃は日本全体ではなく、とりあえずは大和国までのことだったのだろう。だから、五十猛神は紀伊国の伊太祁曾神社（和歌山県和歌山市）で祀られている。

ともかくも、スサノオが最初に目指したのは九州統一ということだったのだろう。そして、次にめざしたのが全国統一だった。これらのことを、本稿では第一弾としてニニギの降臨を取り上げ、併せて「国譲り」の真実に迫ってみる。そして、第二弾をタケミナカタの諏訪降臨と考え、第三弾をニギハヤヒの降臨とみなして論を進めて参りたい。

さて、スサノオの九州への進出であるが、前述のように記紀で記述されているニニギの降臨神話はスサノオの九州進出のことが元ネタになっていると考えられるのである。

高天原が大国主から国譲りを受けた後のニニギの降臨なのに、何故九州（日向）を目指して降臨するのか。九州は大国主の国造りの範囲外だったのか。それにしても、タケミナカタを遠く科野の諏訪まで追いかけて行ったという。そのようにみても、大国主の国造りと国譲りとは何であったのかという疑問も膨らんでしまうのである。この二つの大きな疑問を解くべく、次の記述に進んで行きたい。

「八岐大蛇」を退治して出雲を連合したスサノオは九州に進出したいと考えた。しかしながら、どうやって九州に進出したものかと思悩むことに。出雲の加賀地区に勢力を張っていた猿田彦一派のことは分かっていたが、簡単に取り込める相手ではなかった。先に記述のように猿田彦は船団と解釈すべきであり、強い集団であるからである。このことが、ニニギの前に猿田彦が立ちはだかったと記紀に記述される所以である。

では、どのようにしてスサノオは猿田彦を取り込むことができたのか。猿田彦はどうも宗像海人族と一体であった考えざるを得ないのである。「日本書紀」の記述では、折衝役のアメノウズメは胸を露わにし腰ひもを臍の下まで押下げて対峙した。即ち、スサノオ側としては持てる財などを全てオープンにして交渉にたったのである。これに対して猿田彦は、「自分が道案内する、日向の高千穂の櫛触峯に行くのでしょう」と言うのである。猿田彦はスサノオの目的を知っていたのである。

これらのやりとりがあって、結果、猿田彦の先導でスサノオは九州（宗像）に降臨することになったのである。天照大神とスサノオとの誓約では、宗像三女神を子として生んだと記紀に記述されるので、この地の宗像海人族と連合したと考えるべきなのである。

出雲国二ノ宮、佐太神社（島根県松江市鹿島町）が鎮座する。正中殿に佐太大神（＝猿田彦）・イザナギ・イザナミなど、北殿に天照大神・ニニギ、南殿にスサノオ・秘説四座が祀られている。一体この祭神の構成をどのように説明したらいいのだろうか。“神在の社”というだけでは曖昧に過ぎると思われる。答えは、南殿がありスサノオを祀っていることにあると考えられる。南殿が無ければ、記紀の記述どおりの神社として立派にその存在が認められる

のであろう。しかしながら、実際には南殿があり、スサノオが祀られている。しかも、鎮座するのが出雲国なのである。

問題はここからが重要である。ニニギは日向に降臨するのだから、ニニギ＝スサノオと考えるなら、ここからスサノオは日向に向かって動き出さないとならないのである。となると、ここで八幡奈多宮（大分県杵築市）のことを思い出さないだろうか。大分県国東半島には各所に砂鉄の採取地が記録されている。その中でも大半は東海岸であり、安ヶ浜・黒津・旭・内田・黒川原・塩屋・奈多などの名があげられた。この奈多に八幡奈多宮が鎮座していたのだった。奈多海岸の沖合約300mにある「市杵島」という小島は八幡奈多宮の元宮であった。比売大神（宗像三女神）は最初市杵島に降臨したと伝えられていたのだった。そう、スサノオは船団を組んで宗像を出発し、波をかきわけ、かきわけしながら最初にこの奈多に着地したと考えられるのである。蛇足ではあるが、スサノオの進出の前にオオヤマツミ系の製鉄集団が先行して当地に進出してきていたことは言うを待たないであろう。

宇佐神宮（大分県宇佐市）の祭神は、中央の二之御殿に比売大神（宗像三女神）、右の一之御殿に八幡大神（応神天皇）、左の三之御殿に神功皇后が祀られている。中央の御殿に主祭神である宗像三女神祀られているのだが、何故か全くスサノオの臭いがしないのである。あたかも、過去を消して神功皇后時代からの創建と謳っているがごとくである。そのようなことではないはずである。宗像三女神が祀られるからにはスサノオが登場しない訳がないのである。その証拠の一つに拝礼作法がある。大半の神社での一般的な拝礼作法は「二礼・二拍手・一礼」であるが、宇佐神宮では「二礼・四拍手・一礼」なのである。この拝礼作法を行っている神社は数少ない。代表的な神社として、出雲大社（島根県出雲市、祭神：大国主）、彌彦神社（新潟県弥彦村、祭神：天香久山）が上げられるであろう。

いかがであろうか。宗像三女神といい、「二礼・四拍手・一礼」の拝礼方法といい、スサノオとの関連を抜きにしては語るができないのではないだろうか。

奈多に着地したスサノオはこの地を日向進出の前線基地としたのだった。そして、製鉄豪族として関係の深い近隣の豪族と連合していったと考えられるのである。そして、宇佐の地に政庁を構えたのであった。スサノオは宇佐の地にあつて日向進出の采配を振るうことになる。この時の日向は天照大神が治めていたのだろう。記紀では数々のスサノオの乱暴狼藉が記述される。そして、スサノオに手を焼いた天照大神は遂に天岩屋に隠れてしまうのであった。

ところで、スサノオは何故に日向に進出してきたのだろうか。それは、先に記述のように鉄と青山を求めてきたということになる。魏志倭人伝の記述では邪馬台国にはクスノキとスギがある。これらは正しく古代における船材の代表的な樹木だったのである。

## （ロ）大国主の国譲りとは

ここでは、大国主の「国譲り」の新説を展開したいと考えている。記紀では、スサノオの後を継いだ大国主が「国造り」に励み、その造られた国を天照大神が自分のものだと言主張、何人もの折衝を派遣するも成功せず、最後は力づくで「国譲り」が達成されるのであった。この記紀の記述を念頭におきつつ、これを新説として歴史風に置きなおしてみた。結論を先に言えば、それはスサノオの日向進出に手を焼いて天岩屋に隠れてしまった天照大神の救出譚ということなのだが、以下において順次詳述していくこととする。

そもそも、天照大神の救出譚とする発想がどこからでてきたのか。それは、戸隠伝説の謎を解明しなければ次に進めないという筆者の思いからである。戸隠神社（長野県長野市）は上信越高原国立公園の戸隠高原にあり、古くは戸隠山をご神体とする。九頭龍社、奥社、中社、などで構成される。

九頭龍社は、祭神が九頭龍大神で、奥社に天手力雄命が奉祭される前から地主神として祀られていたという。古来、水の神、雨乞いの神、虫歯の神、縁結びの神として尊信されていたという。奥社は祭神が天手力雄命。「古事記」にある、天照大神が天岩屋に隠れた時、神力をもって天の岩戸を開き、天照大神を天岩屋から導き出したと言われる。そして、天の岩戸を放り投げて地上に落ちた所が戸隠山になったと言われてきているのである。

戸隠神社の起源であるが、上記のとおり九頭龍社が戸隠山を山の神として祀っていたことがその起源ということであろう。但し、戸隠山と名乗るのは奥社創建以降のことと考えられる。そして、山の神は水の神でもあった。新潟県糸魚川市能生に「白山神社」が鎮座する。奴奈川神社論社とされ、祭神はイザナギ、奴奈川姫命、オオナムジである。境内に「蛇の口の水」という湧水がある。これは戸隠山からくる湧水とされ、伝承では戸隠山が龍の頭で、「蛇の口の水」は龍の尾と言われているという。奴奈川族の拠点<sup>のう</sup>は糸魚川周辺であった。従って、古代に戸隠山に九頭龍社を祀り、山の神・水の神として崇めていたのは奴奈川族ではないかと考えられるのである。

さて、問題は天の岩戸が何故に当地に投げられて落ちたかということである。それは、天岩戸から天照大神を誘い出す作戦に奴奈川族が大いに活躍したからとされなくてはならないだろう。そもそも、天照大神が天岩屋に隠れたのはスサノオの乱暴狼藉が理由であった。だから、天照大神が天岩屋から出てくるためにはスサノオを退治しなくては解決にならないのである。では、そのことに奴奈川族が活躍したとはどういうことを意味しているのだろうか。

「古事記」の記述では、スサノオの6代目の孫のオオナムジが兄の八十神の迫害を受け殺されかけたが、根の堅州国に逃げる。そこはスサノオが主の国だった。しかし、そこでも蛇やムカデの室屋に寝かされるなど試練を受ける。しかしながら、スサノオの娘スセリヒメの助けで難を逃れ、スサノオの髪を屋根に結び付けて二人で逃げ出すのに成功する。この段の「古事記」の記述は、時代的なことなど整合性に欠けるのであるが、あらずじを記述するならば次のようになる。オオナムジが出雲国に連合する諸豪族を倒して出雲国に到達し、スサノオの子スセリヒメを娶る。即ち、出雲国を領有する。そして、遂にはスサノオを根の堅州国に閉じ込めるに至るのである。これらにより、オオナムジはスサノオの命名により大国主と名乗り、葦原中国を治めることになる。

では、このオオナムジとは誰か。先述のように、奴奈川族が崇めていた九頭龍大神は「虫歯の神」であった。この「虫歯の神」とは一体何を意味するのか。唐突すぎて訳が分からないというのが本当のところだろう。実は、出雲大社（島根県出雲市、祭神：大国主大神）の古伝新嘗祭の次第の中に「歯固式」という行事があるという。歯が健康のもと、長寿のもとと大国主が教えたらしい。そういえば、「稲羽の素戔」神話でもオオナムジは兎に治療を施したのだった。このようなことから、オオナムジはどうもスサノオとは出自が異なる可言るのであり、医療技術を帯同して渡来した一派ではないかと推量されるのであるが、これこそ能生「白山神社」に祀られるオオナムジに結びついてくるのではないだろうか。

葦原中国を治めた後、大国主は九州に上陸し、宗像、宇佐を治めて出雲を含めて天照大神に譲り渡すことになる。出雲大社の本殿の左側に鎮座する筑紫社（祭神：タギリヒメ）があ

る。これが大国主と宗像三女神タギリヒメとの結婚を意味するものであることは説明を要しないだろう。そして、スサノオに代わって九州地区（＝宗像及び宇佐）を治めたことを示しているのである。

「古事記」の記述では先ずは天照大神の子アメノホヒが出雲に派遣される。しかしながら、大国主に懐柔されてしまう（⇒出雲に受け入れられる）。次に派遣されるのがアメノワカヒコである。アメノワカヒコは大国主と宗像三女神との娘下照姫と一緒に（⇒葦原中国は天照大神に領有される）。

これらのことによって、天照大神は天岩屋から出てくることができた。これを、戸隠伝説では記紀の記述に倣って天の岩戸が戸隠山に落ちたと伝えているのである。これが、記紀で記述される出雲の「国譲り」ということになる。しかしながら、「国譲り」はこれだけの話ではない。以下に続けるので引き続き読み進めていただきたい。

#### （ハ）建御名方命（タケミナカタ）の蟄居とは

「古事記」の「国譲り」の段に記述されるタケミナカタであるが、どういう訳か「日本書紀」にはタケミナカタが登場しないのである。「古事記」の記述が史実でないことが判明したため是正されたのか。「日本書紀」にはタケミナカタの存在自体が邪魔であったのか。或いは存在自体がなかったのか。

タケミナカタは、諏訪大社（上社…本宮<諏訪市>前宮<茅野市>、下社…秋宮<下諏訪町>春宮<下諏訪町>、祭神：建御名方神・八坂刀売神）に祀られている。何故諏訪大社に祀られているのか。一般的に知られているのは、やはり「古事記」の記述であろう。「国譲り」に反対したタケミナカタは、タケミカツチとの力比べに敗れ、敗走して諏訪に追いつめられる。そして、諏訪から出ないことを約してこの地に蟄居することになるのであった。一方で諏訪地方に伝わる神話では、建御名方神（諏訪明神）が諏訪に侵入した征服者として描かれている。これによると、先住神（洩矢神）が建御名方神に対抗しようとして戦いを挑むも敗れ、最終的に諏訪の統治権を御名方神に譲ったとされている。（Wikipedia）

また、「先代旧事本紀」によれば、建御名方神はオオナムジと奴奈川姫の子と記述されている。これは本当のことであろうか。このようなストレートな記述は得てして裏があるものである。後ほど少し検討してみたい。

ここで、先述した長野県諏訪市の足長神社・手長神社のことを思い出していただきたいと思う。オオヤマツミ系の神々が諏訪の地を開拓していた。諏訪の地といえば、縄文時代においては黒曜石などを産出し大いに隆盛した土地だった。スサノオが全国を青山にしようと考えた時に、先ずは九州を治めることだった。そして、次に考えたのが諏訪と北関東だったのでないかと考えられるのである。何故かといえば、諏訪には諏訪を起点とした黒曜石の流通の道があった。従って、諏訪を抑えれば界隈の道が抑えられる、即ち、界隈を治められると考えたのではないだろうか。

出雲の北関東への進出を示す神社の一つが氷川神社（埼玉県さいたま市。主祭神：スサノオ、クシナダヒメ、オオナムジ）とされる。東京都埼玉県に多くの氷川神社が鎮座することが知られている。その総本社が武蔵国一之宮氷川神社である。その摂社に「門客人神社」が鎮座しているのだが、祭神が足摩乳命・手摩乳命であることには注目しておく必要がある。

さて、次の問題は誰を諏訪に派遣するかということである。そこで白羽の矢が当たったのがタケミナカタということになる。タケミナカタは「先代旧事本紀」の言うようなオオナム

ジと奴奈川姫との子ではない。それだったら、一緒にスサノオ出雲の制覇に向かったはずである。やはり、スサノオが九州に進出した時の子とするのが自然である。では、母は誰か。それは、スサノオが九州に上陸した時に連合した宗像三女神の一人ということになるのだろう。“タケ”は武或いは建で強力を意味する修飾語であろう。ミナカタは宗像（ムナカタ）からきたものだろう。

そして、妻の八坂刀売神は足長神社・手長神社の娘だったと推量される。スサノオにしろ、事代主にしろ（後述）、皆オオヤマツミ系の姫を娶るのである。文献的には何も説明するものはないのであるが、ここもそのように考えるのが自然であろう。また、「先代旧事本紀」ではタケミナカタはオオナムジと奴奈川姫の子であったと記述されていたことは先述のとおりである。何故そのような記述になるのかについては次の項にて明らかにするので暫くお待ちいただきたい。

タケミナカタは「古事記」の記述するような敗走者ではなかった。では何故「古事記」ではそのような記述をされてしまったのか。それは、偏にスサノオと宗像三女神との子だったからということになる。オオナムジと奴奈川姫との子だったら、（天照大神を救ったオオナムジの子を）蔑ろにするはずがないのである。何故、スサノオと宗像三女神の子だと蔑ろにされるのかということであるが、それは天武天皇の母親が宗像系であることによるのだが、このことに言及するには紙面が足りないので別途ということにさせていただく。

さて、記紀が編纂された頃、諏訪は中央への軍馬の供給の中心となっていた。そして、軍馬を背景にして軍勢力も強大化していた。「諏方大明神画誌」（1356年、円忠）によれば、神功皇后の三韓征伐や坂上田村麻呂の蝦夷征討に神威を示し、軍神として大いに知られるようになったことが記述されている。敗走して諏訪に蟄居したタケミナカタ（後裔）がそのような勢力を築くはずがないのである。

タケミナカタは敗走者ではなかったのである。それどころか、先んじて諏訪の地に土着していたオオヤマツミ系と連携して大いに勢力を増強させていたのである。それを、「古事記」のように諏訪に敗走させたとか諏訪に蟄居させたがごとき記述になったのは、記紀編纂時の権力者（藤原不比等）の意向が反映せられたということなのであろう。祖先の中臣氏は常陸国の神官と言われている。「国譲り」で主役を演ずるタケミカツチは鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）の祭神である。また、中臣氏の氏神を祀るとされている春日大社（奈良県奈良市）の祭神は、タケミカツチ・経津主命・天兒屋根命などである。その上にタケミカツチは白鹿に乗ってやってきたというのである。天兒屋根命は、ご存じのように天照大神を天岩屋から誘い出す時や天孫降臨に活躍した神である。こうした天皇家の創生に活躍した神々を祖先に持つのが中臣氏（藤原氏）と「古事記」は記述しているのである。

ここまで記述を進めると、どうも記紀の「国譲り」譚や「天孫降臨」譚は中臣氏（及びその後裔）のために記述されている部分が多いとということに気づかされるのではないだろうか。そうなると、記紀の「国譲り」譚や「天孫降臨」譚に沿った解釈論というのも殆ど不毛になってしまうのではないかとということにも…。

## （二）ニギハヤヒと事代主

この項ではニギハヤヒの「天孫降臨」について詳論してみたい。「先代旧事本紀」によれば、ニギハヤヒの別名として「天照国照天日明櫛玉饒速日命」と表記される。この解釈をめぐって様々な見解があるのだが、総じてすべて正しいのだろう。天照と称されるのは天神系の意味がある。国照と称されるのは国津神系の意味がある。天日明（アメノホアカリ）、饒速日（ニ

ギハヤヒ)は固有名詞と解される。どういふことなのか、これから一つ一つ分析して行こうと思う。

先ずは、“天照”。天照といへば天照大神ということになるのだが、それでいいのである。記紀においては、天照大神がニニギを日向に降臨させて、所謂日向三代の物語が展開される。「日本書紀」によれば、ニニギとオオヤマツミの娘・木花咲耶姫との子として、火酢芹命、彦火火出見尊、火明命が生まれる。兄の火酢芹命は海幸彦、弟の彦火火出見尊は山幸彦と称されて二人の確執譚が展開される。そして、火明命は尾張連などの遠祖と記述されるのである。

この火明命は籠神社(京都府宮津市)の主祭神として祀られている。籠神社の神職は古来より海部氏が担っている。「海部氏系図」によれば彦火明命を初代として82代の現宮司までの名が伝えられている。(Wikipedia)

では、火明命は日向の地からどのようにして当地にきたのか。社伝によれば、伊勢神宮外宮に祀られている豊受大神は元々「真名井原」の地、奥宮真名井神社に祀られていたものという。そう、豊受大神は丹波国の比治の真名井から呼び寄せられたのだ。この比治の真名井という地が豊後国にある。現在の地名では大分県日出町真那井である。高千穂峡(宮崎県高千穂町)に“真名井の滝”がある。神話によれば天村雲命が天孫降臨の時この地に水がなかったので水種を移したのが天の真名井として湧水し滝となって流れ落ちているという。(Wikipedia)

これらのことを纏めるとするならば、どうも火明命は日向を出て、後の豊後国を開いた。そして、後の丹波国に進出して行ったのだ。では、何ゆえに火明命は豊後国に向かったのだろうか。それは豊後国が辰砂の一大産地だったからである。また、既述のように界限は砂鉄の生産も盛んな地であった。「魏志倭人伝」に記述される「投馬国」(ツマ)は5万戸の大国であった。北九州の奴国ですら2万戸記述されるのであるから、5万戸が実数ではないとは思われるものの何某かの経済的基盤がないことには絵空事にすぎないことになってしまうのではないだろうか。因みに、日向の都万を出た一派が築いたので投馬国と言ったのであろう。日向族と同族であることは言うをまたない。そして、火明命一族は丹波国に進出した。こちらに向かったのも辰砂を求めてということだろう。界限の丹後国・丹波国という国名がそのことを伝えている。

次は“国照”。国照といへば国つ神、代表はスサノオということになる。スサノオといへば、既述のように自身が九州を目指した。そして、宗像三女神との子・タケミナカタが諏訪を目指した。全国制覇のためには残るは倭(大和)ということになる。「先代旧事本紀」によれば、天照大神がニギハヤヒに降臨を命じた時、八握剣、息津鏡、沖津鏡、ほか十種の神宝を授けた。八握剣は天照大神との誓約の時、宗像三女神を生んだスサノオの剣である。また、鏡は宗像大社の沖津宮、辺津宮を示すような名称である。さらには、ニギハヤヒは天の磐船に乗って河内国に降りた。出発地はといへば宗像であり、宗像大船団が組まれて発ったということになろう。これらのことが示すのはニギハヤヒに降臨を命じたのは天照大神ではなくて、スサノオであったということではなからうか。

では、それは具体的には誰だったのか。それは、スサノオとオオヤマツミの娘・神大市姫との子・大歳尊ということになる。同じくオオヤマツミ系の長髓彦はニギハヤヒに快く妹を差し出したということでも整合性が認められるのである。

問題は、ニギハヤヒこと大歳尊の進出の経路である。先述のように(宗像海人族の大船団を編成したから)、出発したのは筑紫の遠賀川河口からだろう。瀬戸内海を進み、播磨に拠点構えたようである。兵庫県には大歳神社が180社を数えるとされる。そして、いよいよ

摂津国に遷る。滞在地は大阪府高槻市三島江の三島鴨神社（主祭神：大山祇神・事代主神）あたりと考えられる。そして、大阪府交野市磐船神社（祭神：饒速日命）付近を經由して奈良県北部の「登美郷」と言われた地域に滞在することになる。登美郷に鎮座する登弥神社のご由緒では、“神武天皇が皇祖天神を祭祀されたのがそもそもの淵源である。その後、登美連が祖先である天孫・饒速日命の住居地であったこの地に命<sup>みこと</sup>ご夫妻を奉祀したのが当神社の創建である”という。

さて、事代主である。「日本書紀」の国譲り譚では、タケミカツチとフツヌシが大国主に国譲りを迫ると、大国主は美保ケ崎で漁をしている息子の事代主が答えると言った。そこで二神の使いが美保ケ崎に行き事代主に国譲りを迫ると事代主は「承知した」と答え、青芝垣に隠れてしまうのである。この記述によれば、事代主は大国主の子である。また、事代主はあたかも出雲に暮らしていたかのようなようである。本当だろうか。

また、「日本書紀」では、事代主は三嶋みぞくい耳神の娘・玉櫛媛との子、媛たたら五十鈴媛（神武天皇の皇后となる）をもうける。「古事記」では、大物主が三嶋みぞくいの娘の勢夜タタラヒメとの間に比売タタライスケヨリヒメ（神武天皇の皇后）を生んだとしている。

以上のことを纏めて解釈すると以下のようになる。

- ① ニギハヤヒ＝大歳尊でスサノオの子である。大歳尊はスサノオの意志を継いで全国制覇のため倭（大和）を目指す。
- ② 大歳尊は「登美郷」の豪族・長髓彦の妹を娶る。このことは、大歳尊が「登美郷」を領有したことを意味する。
- ③ 長髓彦はオオヤマツミ系であり製鉄豪族で、妹を大歳尊が娶った。事代主が三嶋みぞくいの娘を娶り、媛たたら五十鈴媛をもうけている。このことは、大歳尊＝事代主ということの意味している。
- ④ ニギハヤヒは最終的にはイワレヒコに倭を差し出した。このことは、媛たたら五十鈴媛が神武天皇の皇后になったことと同義である。また、比売タタライスケヨリヒメが神武天皇の皇后になったこととも同義である。即ち、ニギハヤヒ＝大歳尊＝事代主＝大物主ということになる。
- ⑤ 事代主が美保ケ崎で国譲りを承諾し青芝垣に隠れてしまうとの「日本書紀」の記述は、ニギハヤヒがイワレヒコに倭（大和）を差し出したことを意味している。
- ⑥ 大物主については、その後崇神天皇時に疫病が流行し、それが大物主の祟りだということになってくる。とすれば、初代神武天皇から第10代崇神天皇までの時間の経過について説明がなされなくてはならない。このことについての解釈は、第3章にて記述する予定のためお待ちいただきたい。

### 第3章 邪馬台国と卑弥呼

「古事記」や「日本書紀」の記述には「魏志倭人伝」の記述や「卑弥呼」の記述が殆ど著わされないとされる。しかしながら、多くの指摘は記紀の編纂された頃、記紀の編纂者たちは「魏志倭人伝」を熟読していたはずだというのである。では、何故に記紀には邪馬台国や卑弥呼が登場しないのであろうか。その答えは、記紀の編纂は中国に対抗して大和国が中国に負けないくらい古くから王朝があり、連綿と継続していることを喧伝したかったということにあるのだろう。そして、それは日本において生まれた王族でなくてはならなかった。渡来系であることなどはもっての外ということだったのである。

## (イ) 邪馬台国の形成

邪馬台国論議が盛んであるが、それは畿内なのか九州に在ったのかといった場所の議論が中心である。帯方郡からの里程の解釈論が300年を超えて続けられているのであるが、結論がでていないようである。しかしながら、記紀の編者たちは邪馬台国が日向にあったという結論をもって記紀の記述をしているのである。では、これからその解析を試みようと思う。

邪馬台国を形成したのは徐福一行だった！前稿に続き、本稿においてもこのことを検証しようとしているのであるが、徐福一行の渡来前に九州地区がどのような状況であったのかということをおおむね概観しておくてはならないだろう。

時代は、前漢に編纂された「史記」(司馬遷)の記述から、徐福の出航時期が推測されている前219年以降のことであろう。そして、「梁書」に記述される台与が西晋に朝貢した266年頃までのことと考えられる。その間、57年倭奴国王が後漢に朝貢して金印を賜る。107年倭国王師升等後漢に生口160人を献上する。173年卑弥呼が新羅に遣いを出す。238年卑弥呼が魏に朝貢し金印を賜る。これらの朝貢は渡来系の人たちが行ったことと考えることが合理的であろう。何となれば、海に囲まれて外界から隔離されていた日本古来の縄文人にそのようなセンスがあるとは考えられないからである。一方、中国系或いは韓国系の渡来人にとっては中華王朝に朝貢することは、実際に目撃もし、伝聞もされてきた極く普通のことだったのである。

このことは、もう一つのことを示唆している。それは、縄文人中心に形成された地方の豪族(小国家)には中華王朝に朝貢するという発想が生じにくいということなのである。それは畿内の豪族も含まれることは言うを待たない。地勢的に考えて渡来人が最初に日本に着地したのは九州だったと考えることに最も合理性がある。従って、中華王朝に朝貢したのは九州地区に渡来し、九州地区に小国家を築いた人たちだった可能性が大ということになるのである。

さて、以上のように考えた時、邪馬台国が築かれた場所はどこで、築いたのは誰だったのだろうか。邪馬台国が築かれた場所については、既に殆ど結論は出ているのだろうか。そう、九州地区しか考えられないのではないだろうか。問題は、誰(どこからの渡来)が邪馬台国を築いたかである。そして、九州といっても広域であるので具体的にはどこのことであったのかである。

本欄の小稿「徐福渡来はやはり真実だった」において、日本人のゲノム三重構造モデルをもとにして、現代日本人とゲノムが近似する古墳人は、徐福一行の渡来がこれを形成したのではないかと主張した。本稿においては、徐福一行の渡来を少し別の角度から検証してみたい。

所謂「徐福伝説」と言われる徐福一行の着地場所が日本各地に伝わっており、その数30を超えると言われる。地勢的に考えて、先ずは九州に着地、そして、日本海側へ太平洋側へと進んで行ったのだろう。九州では5ヶ所。福岡県八女市(童南山古墳)、佐賀県佐賀市(金立山)、鹿児島県いちき串木野市(冠岳)、宮崎県宮崎市(方士)、延岡市(今山)と言われる。それらの中では、やはり南九州地区に注目してみたい。何故なら、北九州地区は先着のグループ(江南や半島)があり、小国家が築かれ始めていた。従って、北九州地区への着地・基盤形成が容易ではなかったと考えられるからである。

宮崎県宮崎市蓮ヶ池史跡公園。園内に竪穴住居や高床倉庫が再現されるなど史跡公園として整備されている。この一帯が徐福一行の寄港地、宿泊地として伝えられ、徐福のことを示す“方士”という地名が残されている。

何故にこの地に徐福一行が立ち寄る所以があったのか。それは、既述のように砂鉄の産出で賑わっていたことが大きな要因ではなかったか。そして、米作に適していた土地柄であったことだろう。宮崎県から鹿児島県には特異的に多くの地下式横穴墓群が発掘されている。そして、その故地はどれも中国（山東省など）であることが明らかになりつつある。とすれば、それは徐福一行がもたらした可能性がある。しかしながら、それらの築造年代が5世紀から6世紀とされるので、徐福一行の渡来と年代が整合しない。そこで、考えなくてはならないのは発掘された遺跡の場所柄のことである。宮崎市内で発掘された地下式横穴墓は概ね高台などにあることに注目しなくてはならない。どういうことか。市内を流れる大淀川周辺に築造された4世紀以前の遺跡は台風や大雨で流されてしまった可能性が大ということなのである。

もう一つ致命的な問題がある。それは、九州以外にも徐福一行の着地した場所が全国各地にたくさんある。それらの場所に地下式横穴墓が発掘されないのは何故かという疑問である。その答えは、南九州には古代琉球を経由して中国斉国の文化が伝わっていたからなのである。古代斉国などで芽生えた「海上三神山の説」などが古代琉球に伝わり、“ノロ”の呪術、ニライカナイ思想などに具現化されていった。琉球の“ノロ”の墓は洞窟（横穴）である。これが“ノロ”と共に南九州に伝わったものと考えられる。横穴墓が地中に築造されれば地下式横穴墓となり、地上に塚を盛れば古墳となるのである。いずれも、上部から投影すれば、前方後円墳だったり、前方後方墳だったりするのである。

\*「海上三神山の説」…中華民族の神仙思想が神話的ものから、紀元前4世紀頃海上三神山説が斉や燕で広まった。方士たちが神仙伝説を秦始皇帝に奏上した。

宮崎県延岡市。既述のように、「愛宕山」は現地では「笠沙の岬」と言われており、「古事記」に記述されるニニギとコノハナサクヤヒメの出会いの場所に比定されているのである。しかしながら、そのようなことは徐福一行が渡来した頃（記紀が編纂される前において）は知る由もないことであった。従って、その頃、徐福一行が（現在の）延岡市に立ち寄るには相応の理由がなくてはならないのである。肝心なのは今山の方であろう。延岡市今山に鎮座する今山八幡宮は小高い山に在る。それは蓬萊山と呼ばれ、徐福一行が来訪し様々な文化を伝えたとされる。境内には、上陸した時船を繋いだという徐福岩が伝承されている。

本欄の小稿「卑弥呼は初代斎宮だった」の中で、辰砂論を展開した。そこにおいて論じた一つに、徐福渡来の目的は辰砂の発掘と秦国への供給ではなかったかということがあった。そして、日本の辰砂の有力な産地として豊後と日向があった。「続日本紀」の文武天皇2年（698年）、常陸国・備前国・伊予国・豊後国・日向国・伊勢国などから朱砂（辰砂）が献上されているという記述がある。日向の高千穂地区から辰砂が産出されていたのである。徐福一行はこの高千穂の辰砂を目指して延岡に着地した。そして、五ヶ瀬川を辿り高千穂へと登って行ったのではないだろうか。

鹿児島県いちき串木野市の徐福伝説。徐福一行はいちき串木野市の照島海岸に辿り着き、冠岳に登り徐福が自ら冠をとり、この地で封禪の儀式が行われ冠をここに留めたと言われる。

既述のように、記紀に記述される「笠沙の岬」は南さつま市笠沙町にある野間岬が有力視されている。しかしながら、界限に砂鉄の産地の発掘がないことから今一つ信頼性に疑問譜をつける論調もある。ところが、南さつま市からいちき串木野市にかけて広大な「吹上浜」が

あり、砂鉄が含有されていることが指摘されている。この広大な「吹上浜」から産出が見込まれる大量の砂鉄が眠り続けたとは考えにくい。

花塾里遺跡（鹿児島県吹上町）は、「吹上浜」砂丘の内側約2Km、中原集落の標高42mに在り、古墳時代の大規模集落の一部ではないかとされている。このような「吹上浜」の内側の高台に縄文時代から古墳時代にかけての多くの遺跡が発掘されている。何故この地に多くの人たちが住み着いたのだろうか。それは、この地が東シナ海に面していることがあるだろう。そして又、琉球から島伝いに日本に向かえば、最初に界限に行きつくのである。

では、この人たちは砂丘の豊富な砂鉄に気が付かなかったのであろうか。そのようなことは考えにくい。とすれば、製鉄施設が流失してしまったのではないかということが考えられる。具体的な津波等の事実が示されるものの発見は今のところないようであるが、流失の可能性は低くないと言えるだろう。或いはまた、海退による施設の自然風化の可能性も否定できないと考えられる。

\*封禪の儀式…（中国）帝王が天と地に王の即位を知らせ、天下が泰平であることを感謝する儀式。秦の始皇帝が皇帝になった時、泰山で封禪の儀式を行ったとされる。（Wikipedia）

これらの一帯は「魏志倭人伝」では邪馬台国と言われた地域と考えられる。誇張されて伝わった可能性はあるものの、7万戸あったと記述されているのである。砂鉄の産出や辰砂の産出といった経済基盤があるから、広域ではあるが、人が多く住んでいたと伝え

られたのであろう。「先代旧事本紀」では九州は筑紫国、肥国、豊国、日向国の四面であり、日向国は現在の宮崎県と鹿児島県ということだろう。

「古事記」の記述では、黄泉の国から地上に戻ったイザナギは日向の阿波岐原に向かい、黄泉の国の汚れにまみれた体を清めるために禊を行うのであった。この地が宮崎県宮崎市と考える説が有力とされていると思われるのだがいかがであろうか。

また、ニニギが葦原中国を治めるため筑紫の日向の高千穂峰に降臨し、宮を築いたのであった。この地が宮崎県延岡市から五ヶ瀬川を辿って到る高千穂郷ということになる。

もう一つ、ある日のこと笠沙の岬に出かけたニニギは美しいコノハナサクヤヒメに出会い一目ぼれ、ヒメの父オオヤマツミに結婚を申し込むのであった。この笠沙の岬は鹿児島県南さつま市野間岬に比定されている。一方、徐福一行はいちき串木野市照島海岸から上陸したと伝わる。時系列的に考えるとオオヤマツミの上陸が先行していて、砂鉄から鉄生産を手掛けて多くの集落が形成されていたのであろう。そうした場所に徐福一行が上陸するのであるが、やはり異なる場所からの上陸ということになったのであろう。そして、オオヤマツミの姫を娶るのであるから、それはこの地を領有したということの意味するのである。

「古事記」によると、コノハナサクヤヒメは3人の子を産む。出産の時コノハナサクヤヒメは出入り口のない産屋に籠もり、そして、産屋に火を放ち、燃えさかる炎のなかで出産するのであった。生まれたのが、ホデリ（海幸彦）、ホスセリ、ホヲリ（山幸彦）であった。この燃えさかる産屋で出産するという意味がずっと不明であった。しかしながら、オオヤマツミの娘で砂鉄から鉄生産を手掛けている集落の姫であるならば、そのように表現されることが相応しく思えるのである。

（ロ）卑弥呼の出自

「日本書紀」に田油津媛<sup>たぶらつひめ</sup>の記述がある。山門郡に居たとされる土蜘蛛の巫女女王である。仲哀9年3月に神功皇后により誅殺されたとされる。田油津媛には夏羽という兄がいたが、夏羽率いる軍は妹の死を聞いて逃亡したとされる。(Wikipedia)

\*山門郡…筑後国（現在の福岡県南部）にあった郡。福岡県柳川市とみやま市の大部分の地域にあたる。

この記述は神功皇后の熊襲征伐譚の一つとして著わされているのであるが、一つの例として山門郡に女性の土蜘蛛がいたことを物語っている。しかも、巫女女王ということから卑弥呼説もあるようだが、界隈の戸数から否定的な意見が大勢のようである。しかしながら、この話から女性の土蜘蛛（しかも、巫女女王）は山門郡以外にも存在していたのではないかということが示唆されているように思われるのである。

特に注目しておきたいのは、夏羽という弟がいたことである。郡を率いていたというから、それは男王ということになる。祭事・呪術を巫女女王が司り、政治・軍事は兄弟の男王が担当するということが記述の中から理解されるのである。

次に、本欄の小稿「邪馬台国はやはり日向（宮崎）にあった」にて論述した卑弥呼の原像に関係する部分について以下に抜粋してみよう。

『魏志倭人伝の記述。“その国、本亦男子をもって王となす。往まること70、80年。倭国乱れ、相攻伐すること歴年、すなわち共に一女子をたてて王となす。名を卑弥呼と いう。鬼道に事え、能く衆を惑わす。年已に長大なるも、夫壻なし。男弟ありて、佐けて国を治む。王となりてより以来、見る者少なし。婢千人を以て自ら侍らしめ、ただ男子一人ありて、飲食を給し、辞を伝え居るところに出入りす。宮室は楼観・城柵、巖かに設け、常に人あり、兵を持して守衛す”。(大塚初重：「邪馬台国をとらえなおす」)

平たく言えば、倭人の国々は男子を王としていたのだが、乱れた。相互に何年か戦争 状態になってしまった。そこで、これを整えるため卑弥呼を共立して王とした。卑弥呼は鬼道に優れており国民の信頼を得たというようなことが記述されている。また、卑弥呼は独身で年をとっている。弟がおり、協力して国を統治している。注目すべきは卑弥呼が強力な軍事力をもって国々を統治したのではないことである。それは鬼道であったことである。そして、共立したのであるから、これに参画した国々は卑弥呼と同様の宗教観をもっていたからこそ支持されたということである。この頃、九州の多くの地域をカバーするような宗教観とはどのようなことであったのだろうか。本稿では、卑弥呼の原像を沖縄に残る「斎場御嶽(せいふあうたき)」を管掌する「聞得大君(きこえおおきみ)」に求めてみたい。「聞得大君」は、琉球の信仰において最高位の呼称であり、琉球国王に並び、琉球王国全土を霊的に守護するものとされていたのである。

この「聞得大君」、国王の「をなり神」(妹が兄を守護する)と言われる。これが卑弥呼と重なってこないだろうか。また、魏志の伝える“鬼道に事え、能く衆を惑わす”ということが邪馬台国一国のことなら容易に理解できるが、九州地区広域で認知され、女王に共立されたということの意味は、それこそ、九州地区の多くの国々が同様の宗教観を有していたということになるのだろうか。だから、人々にも受け入れられたのである。実はこの「聞得大君」的な宗教観は、もっと時代を遡って沖縄に根付いていたのである。琉球王朝時代以前の沖縄の村落時代(3世紀～12世紀)、御嶽が信仰対象であり、この祭祀を根神(姉妹)が司り、その信託によって根人(兄弟)が政治を行ったという研究も発表されている。このような宗教観

が九州地区にも根付いていたとすれば、卑弥呼が女王に共立されたことが自然に理解されるのではないだろうか。そして、それは沖縄から流れてきた可能性を秘めているのである。』

いかがであろうか。九州各地には土蜘蛛が存在していた。そして、土蜘蛛は巫女女王であった。土蜘蛛には兄弟がいて、土蜘蛛が祭祀・呪術を司り、兄弟が政治・軍事を担当していたのである。時代は邪馬台国を遡る時代だった。この九州各地の土蜘蛛は琉球から渡来した人々であり、九州各地に小集落を築いたのだった。この土蜘蛛の巫女女王の墓は洞窟（横穴）だった。記紀の記述にある、天照大神がスサノオの乱暴狼藉に耐えかねて岩屋に隠れた云々の記述がある。この記述は正しく洞窟（横穴）のことを例えて言っているのだらうと考えられるのである。

このような土蜘蛛の小集落が九州各地に築かれていた。この時代はまだ縄文時代の晩期くらいということになるだろうか。やがて、中国江南地区や半島からの渡来が目立つようになり、時代は次第に弥生へと移っていくのである。そして、大型の徐福一行の渡来が訪れる。既述のように、それは全国30数か所に上陸したという伝承が各地に残されているのである。南九州地区への上陸は既述のとおりである。

実は、この土蜘蛛の思想のルーツは既述のように斉国であり、徐福の故郷なのである。従って、多くのことが受け入れられて徐福一行は南九州地区に上陸し、小集落に同化し、日向に邪馬台国を築くことができたのだらうと考えられるのである。そして、徐福一行が五穀の種や新しい技術を広めたことにより、集落は大きくなって邪馬台国と名乗るほどになった。また、土蜘蛛の巫女女王も徐福一行から「方術」が伝授され、「鬼道」と言われるほどになり、女王卑弥呼として界隈の土蜘蛛の「巫女女王」を掌握するまでになっていったのである。

#### (ハ) 崇神朝の誕生

徐福伝説の伝える徐福一行の着地場所の一つに三重県熊野市から和歌山県新宮市界隈がある。熊野市には「徐福ノ宮」があり徐福が持参したすり鉢がご神体として祀られている。同地から秦の貨幣・半両銭が出土していて伝説と関連するとも言われる。また、新宮市には徐福の墓とされるものが伝わっており、「徐福公園」が造られている。(Wikipedia)

まずは、徐福一行が何故この地に上陸したのかということであるが、それは徐福一行の渡来の目的が先述のように、辰砂の発掘と秦国への供給だったということがある。そして、伊勢国から大和国吉野界隈は大きな辰砂の産地だった。この辰砂を目指して徐福一行はこの地に上陸し、基盤を築いていったと考えられるのである。

ここで、神武東征譚を思い起こしておこう。「古事記」によれば、イワレヒコは日向（美々津）を出発し豊国（宇沙）に着く。そして、筑紫国（岡田宮）で1年過ごし、瀬戸内海（阿岐国→吉備国→速吸門）を経由して、浪速国の白肩津に停泊すると登美のナガスネヒコの軍勢が待ち構えており戦いになる。兄の五瀬命は戦いの中で矢に当たってしまう。五瀬命は言う。“我々は日の神の子だから日に向かって戦うのは良くない。回り込んで日を背にして戦おう”と。それで南の方に回り込んだが、五瀬命は紀国の男之水門に着いたところで亡くなった。そして、イワレヒコが熊野に来た時に大熊が現れて直ぐに消えた。すると皆は気を失ってしまうのであった。そこに、現れたのが高倉下。一振りの太刀を持ってくるとイワレヒコは目を覚まし、熊野の荒ぶる神は切り倒され、兵士たちは意識を回復した。この太刀は高倉下が建御雷神から授かったもので布都御魂と言い、石上神宮に鎮座している。

熊野を発ったイワレヒコは荒ぶる神たちや土雲を服従させ橿原宮で神武天皇として即位する。(Wikipedia)

この神武東征譚は、大きく三つに区分されるだろう。一つは、日向を発ち宇佐に立ち寄る話である。これは既述のように、邪馬台国が辰砂を求めて隣の投馬国(豊後国)に進出したことを物語っているのであった。そして更に、丹後国や尾張にも進出して行った。それは、「日本書紀」のいう火酢芹命(海幸)、彦火火出見尊(山幸)、火明命三兄弟の中で、火明命の果たしたことだった。火明命は尾張連の遠祖ともされているのである。

二つ目は、筑紫国(岡田宮)を発ち瀬戸内海を経由して浪速国(白肩津)で登美のナガスネヒコと戦いになる話である。これも既述のように、ニギハヤヒこと大歳尊の進出の経路のことであった。

問題は三つ目の区分、熊野を発ったイワレヒコは荒ぶる神たちや土雲を服従させ、橿原宮で神武天皇として即位する物語のことである。既述ではニギハヤヒ(=大歳尊)はイワレヒコに倭(大和)を差し出した。また、事代主(=大物主)は娘を神武天皇に嫁がせている。しかしながら、一つ目の区分と二つ目の区分でイワレヒコの存在が既に否定されている。ましてや、ニギハヤヒ(=大歳尊)らが長年にわたって築き上げてきた地盤を他者に簡単に禅譲するはずがないのである。この物語は、熊野で勢力を築いた徐福一行の吉野から伊勢地域の辰砂を入手するための進出と凄惨な戦いであったと理解しなければならないのである。

では、イワレヒコ(=神武天皇)が否定されたとなると、ニギハヤヒ(=大歳尊)が築いた倭(大和)はどのようなになったというのであろうか。記紀では、第2代綏靖天皇から第9代開花天皇まではもっぱら天皇の系譜が語られる。そして、第10代崇神天皇が「古事記」では”初国知らしし御間木天皇“と記述され初代天皇ともとれることから、第2代から第8代天皇までは欠史八代と呼ばれ、後の創作ではないかという説もある。

何故そのような記述にならざるを得ないのか。それは、ナガスネヒコ、ニギハヤヒ(=大歳尊)と続いてきた大和の豪族を、記紀の編者が大和朝と認定したからということになる。そして、記紀の記述に当てはめれば、ニギハヤヒが初代神武天皇ということになる。ニギハヤヒがナガスネヒコの妹を娶ったという記述は、ニギハヤヒ(=初代神武天皇)が媛たたらイスケヨリヒメを娶ったというように読み替えなければならないのである。

この大和朝を力づくで奪ったのが崇神天皇だった。記紀の記述によれば、崇神天皇は第9代開花天皇の子で、第8代孝元天皇の子の大彦命の娘・御間城姫を皇后とする。このことについて、崇神天皇は御間城入彦尊(「日本書紀」とか、御真木入日子印恵命(「古事記」と呼称されるので、御間城姫に入り婿したのではないかという疑念もある。しかしながら、第2代から第9代までの天皇は創作されたものと考えらるなら、それらの記述は、崇神天皇が大和王朝を領有したということを理解しておけばいいだけのことなのである。崇神天皇(=徐福一行)は熊野を出発して吉野を手中に収める。そして、遂には大和王朝をも領有するに至るのである。

問題は、この大和王朝の領有が入り婿だとか、禅譲だとかと言われるような平和裏な領有ではなかったことである。崇神天皇の時代に疫病が大流行する。そして、それはオオモノヌシの祟りであった。オオモノヌシというのは、先述のとおり、ニギハヤヒ=大歳尊=事代主=大物主ということであったので、大和王朝そのものを示すのである。即ち、崇神天皇が力づくで(殺戮をともなって)大和王朝を奪取したことが祟りのもとであったということらし

いのである。記紀の記述では、崇りを鎮めるためにオオモノヌシを三輪山がご神体である大神神社に祀ると疫病が鎮まったのである。

では、何ゆえに記紀は崇神朝の創立を悪し様に表現するのだろうか。それは、崇神朝が記紀の編者(=藤原氏)の意に沿わない(中国・徐福系の)王朝だったからということになる。だから、記紀の記述において徐福を彷彿とさせる記述を殆ど排除した。しかしながら、事実を曲げるわけにはいかないで、崇神朝の創立は記述した。そして、疫病を流行させるのであるが、この頃の疫病は中国の渡来が齎したものであることは明らかであろう。このようなことを、世間では“語るに落ちる”というのではないだろうか。

ところで、疫病の流行に関して気になる出来事がもう一つある。宮中に祀っていた神様を遷すという途方もないことが行われていたことである。崇神天皇と垂仁天皇の2代にわたり、天照大神を皇居から伊勢神宮に遷宮した。また、倭大国魂神も崇神天皇により皇居から遷された。その経緯は以下のとおりである。記紀の記述では、崇神天皇5年、疫病が流行して人口の半数が失われたので祭祀で疫病を収めようと天照大神と倭大国魂神を皇居から遷すこととした。天照大神は豊鋤入姫命に託され笠縫邑に祀った。しかし、淳名城入媛命に託された倭大国魂神は媛が痩せ細ってしまい祀ることができなかった。

崇神7年、倭迹迹日百襲媛命に憑依した大物主神が我れを祀れと託宣した。それで、大田田根子に命じて大物主神を大神神社に祀らせた。倭大国魂神は大和神社に祀らせた。すると世の中は平穏になったというのである。

垂仁天皇25年、天照大神の祭祀を倭姫命に託した。宇陀、近江、美濃と周った倭姫命は最終的に伊勢に落ち着き伊勢神宮を建立した。

この<sup>くだり</sup>件に関しては、問題が大きくは三つある。記紀の記述では、イワレヒコは天照大神をいただいて東征して来て神武朝を立ち上げたのであるから、天照大神が祀られている理由は理解できる。しかしながら、それが遷されるとは一体どういうことなのだろうか。二つ目は、倭大国魂神が祀られていた理由である。そのうえ、遷されるとはどういうことなのだろうか。それは、天照大神や倭大国魂神を押しつけて祀るべき神が現れたということに他ならないのである。三つ目の問題はそれが誰かということである。

一つ目の問題と二つ目の問題は既に記述のように、ニギハヤヒ=大歳尊であり、イワレヒコが大和朝の禅譲を受けたということであれば疑問は解消される。しかしながら、それでは遷宮の理由が解明できないのである。その理由は新たに祀られるべき神が現れたということしか理由付けはできないのである。それは卑弥呼ということになる。徐福一行から方術を伝授され、九州地区では「巫女女王」となった卑弥呼。九州だけでなく、ここ大和においても卑弥呼が「巫女女王」として崇められることになったということなのである。

因みに、持統天皇以降の皇室は伊勢神宮参拝ということが行われることが殆どなかったと言われている。それに引き換え、熊野詣では頻繁に行われていたらしいのである。いわゆる熊野古道というものが残されていることがその証とされるのではないだろうか。何故そのようなになってしまったのだろうか。それは、当時の皇室の人たちが、自分たちが崇めるべき神は誰かという真実を知っていたからということにならざるを得ないのである。

## (二) 纏向遺跡と四道將軍

纏向遺跡(奈良県桜井市)が発掘された。纏向遺跡は弥生時代末期から古墳時代前期にかけての集落遺跡・複合遺跡である。遺跡の大きさは東西2キロ・南北1.5キロとされてお

り、なんと後代の藤原京や平城京に匹敵する規模とされているのである。このサイズは書記の大和朝廷の存在を主張することに疑問を挟みにくいものがある。

また、界限には所謂「纏向型古墳」と称される初期の古墳が点在しており、やがて定型化した大型の「箸墓古墳」に繋がってゆく。この「纏向型古墳」の原型が吉備で誕生し（例えば、倉敷市の楯築墳丘墓）、それに出雲の四隅突出型墳丘墓の貼り石やヤマトの埋葬文化が習合して、後に北九州の豪華な副葬品文化がやってきて前方後円墳が定型化したと考える向きもある。そして、遺跡から発掘された土器は在地系のものだけでなく外から持ち込まれた土器が多いというのである。具体的には、東海系（49%）、山陰・北陸系（17%）、河内系（10%）、吉備系（7%）、関東系（5%）、近江系（5%）、西部瀬戸内（3%）、播磨（3%）、紀伊（1%）である。

これらのことは、纏向遺跡と全国各地との関わりを強く示すものであり、纏向遺跡＝ヤマト王朝としてそれほど外してはいないだろう。それを裏付けるような記述が「日本書紀」にある。それは、崇神朝の記述である。“ハツクニシラススメラミコト”と称された第十代崇神天皇の宮は磯城瑞籬宮（桜井市金屋）、第十一代垂仁天皇の宮は纏向珠城宮（桜井市穴師）、第十二代景行天皇の宮が纏向日代宮（桜井市穴師）と、ヤマト朝廷発足時の都が三輪山や纏向界限に築かれていたことが記述されているのである。

しかしながら、それらのことは纏向遺跡＝ヤマト王朝＝古墳時代を示しているのではあるが、纏向遺跡＝邪馬台国と言っているのではないのである。このことを立証するためには、纏向遺跡と卑弥呼との関係を具体的に表わさなくてはならないのである。しかしながら、従来から論じられてきた畿内説の卑弥呼論からはその関係性について多くの研究者を説得できるものは著されていないのではないかと思われる。

なかでも注目されるのは、外部から持ち込まれた土器が多いということである。そもそも土器の製造は女性が分担していたのではないかと考えられている。とすれば、外部から持ち込まれたというよりも、外部のご一行が遺跡に移り住んで、纏向遺跡に残されている建物等を築造していたのではないかと考えられるのである。そして、近隣の河内系と近江系を除けば、東海系・山陰北陸系・吉備系・関東系が主力であったということになる。

となると、崇神天皇の四道將軍の派遣の話の思い出さないだろうか。「日本書紀」によれば、崇神10年に北陸に大彦命、東海に武渟川別命、西道に吉備津彦、丹波に丹波道主命が遣わされた。それぞれ將軍の印綬を授けられ、翌崇神11年には地方の敵を帰順させて凱旋したとされている。

いかがであろうか。四道將軍の帰順させた地域と纏向遺跡から発掘された土器の地域が重なって来るのではないだろうか。このことの意味するのは、帰順した国々から纏向の新しい宮を築造する人足を徴収したということではなかったか。それも長期にわたる任務のため家族で仕事にあたらせたという風に理解されるのである。

本稿の最後に倭迹迹日百襲媛命に触れておきたい。既述のように、崇神7年、倭迹迹日百襲媛命に憑依した大物主神が我れを祀れと託宣した。それで、大田田根子に命じて大物主神を大神神社に祀らせた。倭大国魂神は大和神社に祀らせた。すると世の中は平穏になったということがある。また、武埴安彦の謀反を予知するなど巫女的役割を担っていたとされてい

る。それらのことから、倭迹迹日百襲媛命＝卑弥呼という説も論じられている。しかしながら、卑弥呼は九州の邪馬台国にいたのであって、大和には来ることができないのである。

本稿では、倭迹迹日百襲媛命は卑弥呼ではなく、崇神天皇にとっての「聞得大君」、即ち、国王の「をなり神」（妹が兄を守護する）であったのではないかと考えるものである。この淵源は「斉国」の鬼道にあり徐福一行が帯同してきたものだった。

そして、そして、熊野に上陸した徐福一行が吉野を征服、大和を攻めて樹立したのが崇神朝だった。「日本書紀」では御肇國天皇（はつくにしらすすめらみこと）と称されているのである。

了